

年間第 18 主日 8月 1日 分かち合い

今日の福音では、先週に続いて、イエスがわずかのパンを増やして5000人の人に食べさせた出来事を記すヨハネ6章が読まれました。今年は8月の間の主日に、継続して読まれてきたマルコ福音書の間に挿入される形でヨハネ6章が読まれます。連日、猛烈な暑さに見舞われる中で、砂漠をさまよったイスラエルの民に与えられた不思議な食べ物、そして、イエスが人里離れたところで、人々の飢えを不思議なパンで養われたことの意味を考えるのはふさわしいことです。

第一朗読の出エジプト記では、人々が食べ物も飲み物も碌にない荒れ野という限界状況に置かれ、彼らをエジプトから導き出したモーセとアロンに不平を言いだしたことが読まれました。そして、彼らの嘆きを聞かれた主が、不思議な食べ物—マナーで人々を養うことをモーセに知らせ、事実、そのように、砂漠の生活の間、イスラエルの民は、マナで命をつないだことが聖書に記されています。しかし、それは、ただ、人々の苦しみの中からの嘆きを神が聞き入れ、そこから導き出したということではなく、「人はパンだけではなく、神の言葉によって生きる」ことを知らせるためだったと、少し後の時代に書かれた『申命記』は記していますが、はたして当時のイスラエルの人々はどこまで理解していたのでしょうか。

イエスによって、満ち足りるほどパンを食べた群衆は、イエスを追ってカファルナウムにまでやってきます。そのとき、イエスは人々に言います、「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」と。人々は、イエスによって飢えを癒され、満腹したことを忘れずにイエスのもとにやってきます。しかし、それは、あくまで、パンのため、パンで飢えを癒されたためでした。それ以上のこと、そこに含まれていた「しるし」の意味のことなど、まったく考えることができませんでした。そして、イエスは言います、「朽ちる食べ物ではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」と。申命記の中で、「人はパンだけではなく、神の口から出る言葉によって生きる」と言われた言葉と重なります。

共観福音書から、少し後の時代に書かれたヨハネ福音書は、同じイエスの不思議な業に触れるにしても、その事実だけでなく、その奥にある意味、神がそれを通してなさろうとしておられたこと—しるしの意味を解き明かそうとして、群衆とのやりとり、そして、後に出てくる「ユダヤ人」たちとのやり取りに多くのスペースをあてます。

しかし、人々が考える「しるし」はあくまで、目を見張らせ、人をあっと驚かせるような「しるし」ですが、イエスは、しるしとは、そのようなものでなく、むしろ、不思議な出来事の背後にある神の業を信じる心であると言われます。

そして、ヨハネは、ついに、イエスが目指していたことの真実を、次の言葉で明らかにします。「わたしが命のパンである」と。人となられた神の子イエス自身が、人々をまことの命に生かす糧であること、そのために、自ら、人の世に生まれ、人々と共に生き、自らのすべてを人々のために差し出し、その飢え、渇きを決定的に癒す存在であることを宣言されるのです。

群衆は、このイエスの思いをどこまで理解できたのでしょうか。「ユダヤ人」は、反論するばかりで、それを受け止めることができません。弟子たちの多くも、それを機に離れていったとヨハネは記します。わたしたちはどうでしょうか。「あなたは永遠の命のかて、あなたをおいてだれのところに行きましょう」と答えたペトロのように、命の糧となられた主に、最後まで従う恵みを祈りましょう。(S.T.)